

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370300727		
法人名	社会福祉法人 仁和会		
事業所名	グループホーム聖心園		
所在地	熊本県人吉市南町8番地1		
自己評価作成日	令和2年11月29日	評価結果市町村受理日	令和3年4月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和3年3月14日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

温かい雰囲気の中で、笑いの絶えないその人らしく過ごしてもらえるように心掛けている。利用者一人ひとりの出来ることを活かしながら家庭的な雰囲気の中で生活が出来る。本来ならば、庭に出て花を見たり、歌をたったり、母体施設の行事に参加し地域の方やご家族と一緒にステージ発表したりと地域との交流、ご家族と親睦も深めていた。しかし今年はコロナ禍で地域とかかわる行事も中止となり、面会も制限される中、ご家族と疎遠にならないよう手紙や電話など出来る範囲で支援している。安心安全な暮らしを守る為、母体施設と連携し行動している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者の変更という変革期とともに、コロナ禍や大水害を経験する等様々な課題に真摯に向き合い、コロナ禍により外出が出来ない分、入居者の笑顔を絶やさないと職員も笑顔を持ってケアに取り組み、入居者個々の心身の変化に気づきや観察を生かしながら、今できることを支援している。日々の暮らしに役割ある生活が精神面での安定や機能維持、更に自信回復等に繋げる等、“個”を視点をあて、検討したプランニングの確かさといえる。また、これまでは毎月訓練を行うなど防災に対する危機意識を高くしたホームでは、水害を想定した訓練後に豪雨を体験し、いち早く母体施設へ避難しているが、この事案は命を守るという使命と、訓練の賜物として大いに評価できる。面会の制限がかかるなか、窓越し面会に訪問される家族の様子に、これまで築き上げてきた家族との良好な関係が垣間見られるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが ○ 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝引継ぎの前に、法人の基本理念とグループホームの援助目標を職員で読み上げ意識付けを行っている	法人の理念及びグループホームの援助目標3項目の唱和により意識付けとし、法人全体の朝礼に参加し情報を共有している。今年度は新管理者となり、まずは入居者及び家族との信頼関係を深め、入居者が笑って過ごせる環境に努力されている。新型コロナウイルス感染症により、家族との交流等行事が開催できなかったと振り返り、この一年、笑顔を決やさず、気づきあるケア、観察力を生かし、家族の声を大切に真摯に取り組んでいる。	日常のケアの中で入居者との関係性を深め、毎日窓越し面会をされる家族等、家族との良好な関係が築かれている。コロナ禍の中で職員が一堂に会する会議は困難な状況にあり、職員会議の開催が出来る状況になれば、振り返りの場を検討いただきたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	本来なら母体である施設で、夏祭り、敬老会、文化祭など町内会やご家族との交流を行っているが、現在コロナ禍で、面会、外出が制限されている中、決まりの中での交流や町内の方へ日頃の挨拶を行った	天気の良い日には庭先に出て近隣住民と挨拶を交わす事もあるが、外出や出会う機会が制限され、これまで継続して開催されていた行事も開催できない状況にあり、法人での文化祭は中止となったがこれまで通り作品の展示やコスモス等見学に出かけながら交流している。	入居者が地域とつながりながらの生活は今では難しい状況にある。コロナ収束後には、“地域との関わりの中で喜びと達成感のある暮らしの支援”とする援助目標が実践されることと期待したい。近くにある社会資源をリサーチされることや、これまでの関わりのある町内会等の活動が開催されることで交流促進につながるものと大いに期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	施設見学や入所者希望の方の相談時には認知症の理解や支援方法等提供している。今年は施設見学はコロナ禍でもあり中止している		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	参加者からご意見や質問に回答し、すぐに対応できない時は、次回の会議までに回答出来る様に努めた。今年はコロナ禍でもあり書面での開催を行っているが、同様に頂いた意見や要望を共有し実践に努めた	今年度は、書面開催として、運営推進会議委員に意見等を収集し、次回の会議の中で開示する体制としている。委員から新聞記事により家族との面会方法などのアドバイスが挙がる等有意義な会議で有り、出された意見も報告書の中で開示している。2ヶ月毎の活動や研修、ヒヤリハット及び事故等とともに入居者の様子は写真という視覚をを通じて報告とし、委員には手渡ししている。	家族は代表1名の参加となっており、代表以外の家族にも議事録等を配布されることで、全家族との情報の共有化とされることで、更に家族との関係性の強化につながるものと期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議のメンバーに市の担当職員が入り実情を伝えているが、今年はコロナ禍で書面での開催となっているため、情報の交換は最小限となっている。	豪雨災害後、市からの依頼である家族の様子確認等にホーム側が行政と家族との間に入り、情報を行政に伝えている。また、入居者の被災証明等にも対応しているが、必要最低限の関わりではあるが、新型コロナ感染対策への情報等は法人を通じて把握している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	研修資料や身体拘束委員会防止委員会を3ヵ月に一度開催し結果を職員へ書面にて周知している。玄関は利用者安全の為、施錠している	身体拘束廃止に向け指針を整備し、身体拘束廃止委員会を3ヶ月毎に開催し、利用者の状況報告をもとに検討し、職員へは書面により周知を図っている。研修も資料により個別研修としている。入居者個々の帰宅願望を把握し、落ち着きがないときには気分転換に努めている。また、家族の同意のもと、転倒防止にセンサーマットを利用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	指針の確認や研修へも参加し、身体拘束と虐待との関係性について学ぶ機会を持って利用者の状態を共有し、職員がストレスにならないように行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	部署研修や資料等を持ち寄り、職員が学びの機会を持てるように情報提供し共有している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	解約や改定時には、理解できるように説明を行った。不安や疑問がないかも合わせて確認しご理解される様に取り組んだ。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進委員のメンバーとしてご家族に参加してご意見やご要望を言って頂いてる。今はコロナ禍で書面でのご意見を頂き、運営に反映し次の開催時にご家族へ報告している。	運営推進会議を問題提起の場として書面で意見を収集し、次回の運営推進会議の中で検討、開示している。また、訪問を制限した中で、ホームから不足品を依頼したり、被災した家族に代わりカタログ販売等を活用している。広報誌による家族への情報発信源とし、家族からの年賀状や、毎日手紙をしたためて訪問される家族等入居者と家族との関係性が表われた事案である。また玄関先には意見箱とともにアンケート用紙を備え、第三者委員の存在やホーム内外の苦情相談窓口を明確にしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎朝引継ぎ時や業務中でも随時、問題や課題があれば聞いている。改善し決定事項などは連絡帳で共通理解を行っている。個別でも話を聞いている。	日々の引き継ぎ日誌により内容を確認し、随時検討・改善し、内容によっては検討会議の中で合議する体制としている。管理者は職員の悩みや業務について個別に面談したり、キャリアパスの中で個別に話し合う等職員が意見や提案、悩み等を発信する多くの機会を作っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回キャリアパス育成面接を行い日々の努力を評価し賞与などに反映するシステムがあり、確認している。またいつでも相談できる状態にしており改善を図っている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修案内が来たときに勤務上参加が可能な職員に声をかけている。また園内研修、部署研修で新たな知識や再認識できる機会を設けている		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	年6回、グループホームのブロック会の研修会や交流会に参加している。研修資料を職員間で共有し質の向上に努めている。今年はコロナ禍で研修の機会も減り交流の機会も減っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初めて家族と離れての生活となり、混乱や不安な表情が見受けられることがある。関わりを多く持ちながら、不安や要望を傾聴し少しでも安心できるように努めている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所時にご家族から不安なことや要望等伺い、利用者とコミュニケーションとり早くなれて頂くように信頼関係を築けるように努めている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所時にご家族に話を聞き、どのような生活をされていたか、何を望まれているかを聞いて把握に努めている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共に生活しているという気持ちを意識し、利用者の出来ることを把握、一方的な介助にならないように声かけし自立支援に努め、頑張っ出来た事を笑顔で喜びを共有するよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	去年までは文化祭など行事にご家族協力の下、利用者と一緒に発表したり、食事をしたり家族との繋がりを支援した。今年はコロナ禍で行事もなくなり面会や外出の制限もされご家族との関わりが減っているが、電話連絡や来園時に情報提供、通院介助も協力をお願いし関係が途切れないよう努めた		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	知人の面会や家族との外出など体調に合わせて取り組めるように支援していた。今はコロナ禍での制限も有り、制限の中、出来る範囲で取り組めるように努めている	これまでの馴染みの関係性を把握しているが、訪問の制限や、馴染みの場所への外出を課題としている。美容室からの定期的な訪問、家族からの年賀状、毎日訪問される家族との窓越し面会等家族を中心として関係性の継続に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の間に入り、話のきっかけ作ったり耳が遠い人への会話の橋渡しとなり、孤立がないように努めている		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や他施設入所となり契約が終了しても、継続的に支援が出来るよう関係機関やご家族に情報を提供している		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話の中から本人の思いや希望を伺うことがあれば添うように努め、本人から伺うことが出来ないときはご家族にも確認するように努めている。利用者の行動からもさみしさや不安も感じていることもうかがえるので傾聴しながら気持ちにより添っている	入居者には日々の生活の中で聞き取りしており、家の事が心配との思いに、家族電話で説明していただく等入居者の思いを代弁している。ジェスチャー等を非言語的コミュニケーション等を駆使し、会話の中で思いを引き出し、発語困難や言葉の不明確等にはうなづきを意思として捉え、行動や表情等推察しながらケアに繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時にご家族に話を聞き、どのような生活をされていたか、何を望まれているかを聞いて把握に努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活で気づきの視点を持って観察を行い、状態把握を行い職員とも情報を共有し状態の変化の把握に努めている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月に一度ケース会議を行い、担当者や気づきのある職員から課題を持ち寄って現状把握や改善に努めている。半年に一度モニタリングと再アセスメントを行い皆で共有している。	毎月のケース会議や半年毎のモニタリングにより継続可否を見極めている。入居者や家族、主治医からの意見書、介護計画担当者及びその日の職員で話し合い、入居者の思い等をプランに反映させている。出来ることや得意分野を発揮することで自信回復とするプランや、職員の観察力を生かしたプランが作成されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子の中でケアの改善が必要な時は、その場で検討し改善したことを連絡帳等に記載し共通理解を図り、実践、経過観察を記録している。その後振り返りも実施している		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の状況に変化があれば職員間で話し合い、ケアの変更や、過去の成功体験を基に試行錯誤しながら可能な限り対応している		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣の幼稚園の運動会や母体施設の行事等に参加。また近隣を散歩し花見なども行い会話も弾んでいる。近所の美容室の来園時には会話を楽しみながらカットして頂き地域との交流を図っていた。今年はコロナ禍で母体施設での行事も中止、外出も減った		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所時にかかりつけ医をご家族と相談し決定している。通院時はご家族の付き添い支援を得て、かかりつけ医に対し文章での情報提供を行い、必要によっては家族と同行し状態報告、アドバイスを伺っている。	本人・家族の意向を尊重しかかりつけ医を決定している。入居を機に母体医療機関をかかりつけ医とする方もおられるが、現在数名の方が入居前からの医療機関をかかりつけ医とされている。家族が受診に協力されており、情報提供書によりスムーズな受診とし、内容や主治医からの指示をホームでも把握している。徒歩圏内にある母体医療機関へは歩いて出かけ、入居者が地域へ出る機会の一つとなっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者との関わりの中で、表情や体の変化があれば、看護師に報告し、必要に応じて病院受診につなげ、早期の改善につなげている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院迄の経緯やADLの情報、認知面についての情報を提供している。病状が安定されれば、病院関係者やご家族等のご意向を聞きながら対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に重度化された場合の説明を行っている。また重度の方については、更新時に看取りも含め特別養護老人ホームの話もして必要に応じ入所申し込みを行っている	入居時に重度化した場合の指針に基づき説明し、必要な時点であらためて話し合い、同意書を交わしている。ホームとしては終末期ケアに取り組む体制にあるが、殆どの家族は特養での移行を希望されており、入所手続きを完了されている。職員は、入居者との普段の日々を大切に、支援に当たりたいとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	母体施設での救命処置の研修会に参加したり、急変や事故発生時にもマニュアル化し慌てず対応できるようにしている		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎月避難訓練を実施、職員全員が身につけるよう交代で行っている。その際は、近隣にも知らせている。防災や消防署からの指導も受けている。地域の消防団への協力も得ている。母体施設に備蓄を備えている。今年はコロナ禍であり本体に合わせるとの指示で数回しか行っていない	昨年6月に水害を想定した机上訓練直後に、人吉・球磨地方を襲った大水害を経験している。ホームに直接的な被害はなかったものの、これまでの町の様子は一変し、入居者や職員の不安な日々を余儀なくされている。例年であれば、毎月避難訓練を実施していたが、コロナ禍に回数は少なかったが、火災を想定した訓練が行われている。備蓄については、法人施設での管理として、ホームもリストで確認している。	日誌の中に防犯、防火のチェック項目を設け、職員が日々確認している。防災マニュアルに有事の際の避難先を母体施設としていたが、大水害を教訓に市役所庁舎も追加すべきとの声が上がっており、早期の対応に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉遣いや接遇マナー、プライバシー保護については、研修会を含め定期的に周知する機会を持っている。利用者の言葉を否定せず傾聴する姿勢をもって対応している	法人全体で言葉遣いや接遇マナーに力を注いでおり、職員は日々の行動を振り返り、3月毎に自己評価を行い、管理者が評価する体制としている。入居者への傾聴する姿勢や、トイレ誘導時の関わり等に入居者を敬う姿勢が表われ、居室入室時のノックの徹底等教育が行き届いたホームである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ふれあいや会話の中で希望や心配事が聞かれる。家が心配、手紙を書いてみたい、と言われたら、書けるように支援したり、ご家族に支援を仰ぎ電話で話をしてもらったりして対応した		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入所者それぞれのペースに合わせ希望を聞きながら支援している。外出日や体調不良時など入浴日と重なる場合には、臨機応変に対応し、スケジュールに当てはめることなく支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	気に入っている服などを自宅から持ってきて頂いたり、本人に着る服やスカーフなど着用するか確認も行っている。また整容やスキンケアも支援している		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食前に嚥下体操、メニュー紹介を行い、食事中は音楽を流している。エプロンの準備やトレー拭き、台拭きなどとして頂いている。食事は母体施設からの提供であるが、朝のご飯、味噌汁はホームで作っている	調理の殆どが母体で行われる為、ホームは朝食の炊飯と味噌汁を作っている。入居者が調理に関わる機会はないが、テーブルやトレー拭き、使用後のエプロンたたみ等出来ることを手伝われおり、テーブル拭き等の役割のある生活により精神面で安定と機能維持に反映させている。嚥下状態を見ながら、きざみやミキサー食を提供し、食事前の口腔体操により食への期待や、誤嚥防止に努めている。行事食として、ちらし寿司や赤飯、つぼん汁等の郷土料理が食卓に上っている。	栄養士による残食確認がされることもあるようであり、職員が入居者に変わり食での気づき等を代弁いただき、今後とも楽しい食を提供いただきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日の食事摂取量と水分量は確認を行っている。水分摂取が少ない方には好みの物を準備し、食事は、自立に向け食器や形態も変えたり排便の有無も確認している。栄養士、看護師とも連携している		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内の不衛生が肺炎の要因であると理解し、個々に沿って歯ブラシ、舌ブラシ、口腔洗浄液を使用し、口腔ケアを支援している。夕食後は義歯洗浄剤も使用しケアに努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	尿便意がある方は、おむつの方であってもトイレでの排泄を支援している。曖昧な方は個々の排泄パターンを把握し対応。声が小さかったり車椅子自走ができていない方についても表情を見て声かけし誘導している	トイレの訴えのある入居者へは誘導や見守りにて支援し、尿意の無い方には排泄間隔やしぐさからくみ取り、声掛けや誘導し失敗が無いように支援している。日中はトイレでの排泄を基本としていることが、独歩や車椅子を自走しながらトイレに向かう姿に確認出来た。排泄用品は遠方の家族や水害にて被災された家族へはカタログでの購入とし、他は面会を兼ねて持参されている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄のパターンを確認し、また日々水分摂取量の観察、摂れない方には好んで飲まれるものに変更するなど、摂取できるように工夫している。また主治医、看護師と相談し個々に応じた便秘予防に取り組んでいる		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	会話をしながら楽しく入浴できるように支援している。曜日を決めて対応しているが、通院や外出、本人の体調や気分に合わせて変更し個々に浴うように努めている	週2回午前中を基本とした入浴を支援しているが、個別の外出日や入浴拒否には別日に対応している。浴室にはリフトが設置されており、全入居者が湯船に入り職員との会話を楽しみ、柚や菖蒲湯等を提供している。	夏場の入浴について、皮膚疾患等が心配される時期でもあり、入浴回数については、入居者や現場の職員の意見を聞きながら検討されることを期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	朝から起きている方も多いため、午睡の時間を設けている。またホールで過ごす方にはソファでゆっくり出来るように努めている。日中は活動を促し夜間良く休まれるように支援している		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ケースに薬の情報書を綴っており確認できる。服薬時には二人で確認し、本人の前でも確認し誤薬を予防。状態が変化した時は主治医に相談。薬の変更時は、連絡帳等で共通理解しその後の観察に努めた		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	集団でのレクリエーション後に個々にやりたいと言われる物、得意な物、出来る物を提供している。また洗濯物たたみ、お盆拭き、エコ袋づくりなど役割とじて実施されている方もおられる		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は近くを散歩し地域の方々に挨拶を交わしながら交流したり、本体での行事や慰問などにも出かけている。遠方から帰省のご家族についてもご家族支援のもと外出もされている。今はコロナ禍でご家族を含め交流や外出が制限されているがその中で、母体施設の横に花を見に出かけた庭に出たりしている	この一年、コロナ感染対策や豪雨災害により母体施設での行事や地域との交流を中止しており、庭先で花を見たり、受診も外出の一環として家族や職員と出かけている。外出が制限された中で、職員は入居者とゆっくりと関わり、ホームでの行事やレクリエーション、個別の塗り絵や手仕事等を通じて室内での活動を充実させている。	コロナ収束後には、家族に依頼し散歩や外出に協力が得られるよう働きかけに期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族に了解を得て、出張販売で買い物される事もあります。現金を持っておられる方もおられます。今はコロナ禍で災害もあって買い物はご家族が施設で対応している		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙が書けることが出来る方には、書ける環境を作り、また書けない方は、葉書に写真を貼り近況報告を行っている。電話についても職員がそばにつき添い、聞き取りにくいようであれば対応している		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホールの窓からは紅葉の木が見え葉の色変わりや天気の良い日はウッドデッキに出て季節を肌で感じて頂いている。また季節に応じ花や写真、壁飾りなど掲示物を変えている。	日中は殆ど入居者がリビングを中心にした生活であり、車椅子でのトイレ移動等がスムーズに出来るようテーブルや物品を配置している。リビング前のウッドデッキは洗濯干し場や外気浴に使用され、職員は掃除や整理整頓を徹底し、明るく居心地の良い空間を提供している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事の際は、利用者の関係性を考えながら席の移動を行っている。また利用者の状態を考えながら、ソファの活用して安楽に休める場を提供している。独りになりたい方は居室で自分の時間を過ごされている		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の写真を飾ったり、馴染みの家具や布団などを持ってきて頂いている。個々に合わせベッドの位置なども考え良い空間を提供出来るように努めている	入居に際し、使いなれたものの必要性を説明しており、自宅から筆筒や時計、位牌等が持ち込まれている。豪雨災害を受け新たに家族が用意されたケースもあるが、ベッドの位置を決める際には自宅での向き等を聞き取りし、配置を決める等入居者が落ち着いて生活できる環境を作っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内は、バリアフリーとなっており、車椅子での自走や安全に立位出来るように、トイレ、浴室内は手すり、サイドレール、またはPバーを設置し出来ることが生かせるように支援している		